

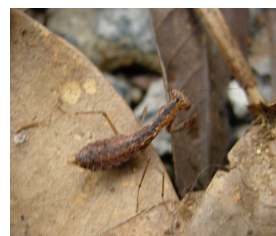
過去が見える

1. 生息しないヒナカマキリ

打吹山で見たことのない昆虫の紹介です。発見者がいないだけで生息しているかもしれません。鳥取市の久松山では普通に見られるカマキリです。写真は久松山で撮影したものです。

日本で最も小型、体長1.5cm前後の落ち葉色をしたずんぐり型のカマキリです。翅はないに等しく、落ち葉の上や下を歩き回って昆虫を捕らえます。

打吹山では、オオカマキリ、コカマキリ、ヒメカマキリ、ハラビロカマキリの生息が確認されています。ヒナカマキリは常緑広葉樹林が生息域で、シイやタブノキの林床が活動場所です。打吹山は常緑広葉樹がよく繁茂している場所なのですが、なぜ発見されていないのでしょうか。



ヒナカマキリ (久松山)

生物にはそれぞれ生存に必要な生息環境があります。移動力の弱い生物は、環境が破壊され、一度そこから絶滅すると容易に再分布することができません。常緑広葉樹林に分布するヒメハルゼミについてみると、県中部地区では3つの神社境内にのみ分布しています。神域として植生が守られていたのです。このことから考えると、打吹山や周辺の山地は、かつて大規模に森林が伐採され、現在のような状態になかったのです。室町期、山名氏や尼子氏の戦場となった時代は裸山同然になり、江戸時代になって放置され、今の植生になったのですから。

冬季は卵囊を見つけやすい時です。石や倒木の下などに1本角が出た1cmに満たない卵囊を見つけられた方は倉吉博物館へご一報ください。

〔追記〕2018年に1頭、2019年に2頭の成虫が確認されました。

2019年末には椿の平で卵囊(写真)を発見しました。



ヒナカマキリの卵囊
5~10 mm (打吹山)

2. モミの切り株

2018年11月下旬、歴史民俗資料館の上にある遊歩道脇のモミの枯損木が処理されました。斜面ですので方向によって高さが変わりますが、最長58cmの高さでほぼ水平な輪切りにされました。年輪がよく見える状態だったので数えてみると、150ありました。数年前から枯れていましたので明治元年には芽生えから数年経っていたこととなります。



モミの切り株

写真のようにほぼ同心円状に成長しています。これは陽の当たり方が四方から同じようであったことを示します。また、最初の40年は後年に比べれば年輪幅が大きく、生育が良かったことがわかります。しかし、直径が50cmばかりで、この樹齢のモミとしては生育が良くありません。ずっと日当たりの良い場所に生えていたことが判明している同年代の木は、122年で直径1m以上ありました。この木は半分もありません。周囲に大きな木があったのでしょうか。年輪幅はどの部分も同じ



年輪幅の広い 40年間



年輪幅の狭い 60~70年(印は10年毎)

ではなく、最大で4mm、最も狭いところは北北西方向で、昭和初期の樹齢60年~70年の10年間で4mmでした。範囲が広い場合は陽当たりが影響しますが、狭い時はその上部の枝の生育状況に支配されていると思われます。

年輪はその樹の置かれた長年の環境を物語るとともに、温暖・寒冷の気象をも教えてくれます。

(倉吉博物館専門委員 國本洗紀 2018)